

女化通信

昭和5年生まれの高松求氏は、茨城県牛久市女化町という畠地帯に住む複合経営農家である
ご自分ではすでに引退した「経営者」だという同氏だが
その経営体験から生まれるさまざまなアイデアや経営への考え方
聞く者の規模や作目を問わず、示唆に富む
「女化通信」のタイトルで同氏のその時々の仕事と
本誌とも共同で進める経営実験の模様を紹介していきたい

⑦

小麦作で始める耕作放棄地での経営実験

首都圏といわば、今や日本全国に耕作放棄地が広がっている。それも条件の整った畠が草ボウボウの荒れ地となつて放置されている。

自分の畠が草だらけになつていて

に何も感じない農家なんていないだろ

う。多くは、高齢化して農業に取り組める状態ではなく、また、経済的にもその必要が無くなっている場合も少なくない。美観だけでなく火事や犯罪の原因になるからと、草刈りが条例化している自治体もあり、それが負担になつてる地主さんも多い。

農業経営に可能性を感じる人であれば、それを放つておく手はない。本誌でたびたび指摘しているように、こうした耕作放棄地は府県での「畠作的経営」を進めるための願つてもない条件なのである。識者は農地の流動がないと声高いが、少なくとも関東地方であれば、借地料はタダでも畠の借地に困ることはないと話す人も多い。農地の貸し手がいないのではなく、頼むに足る経営者が少ないだけなのである。もつとも、自分の畠が土壤障害で作れなくなつたからと、人の畠を借りて荒して回るような者もいないわけではなく、それでは貸し手も寄つてこない。彼は荒す畠だけでなく、やがては彼自身も自滅していくのだ。

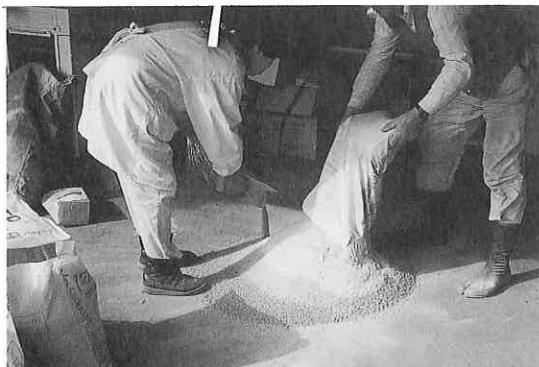
吹き飛んで、地代を取るより以前に、自分の畠が優良農地として維持管理してくれる人なら無償で貸しても、世間の目を気にして草だらけにしてるより、ずっと気楽なわけだ。

荒れ地に麦を播く

さて、そんな草ボウボウの耕作放棄地は、高松さんの住む牛久市にも沢山ある。高松さんは、以前にも隣家の放棄している畠を陸稲から始めて「回復」させたことがあります。それについては本誌第4号の経営者ルポを始め、その後の展開も何度か取り上げてきている。

前回、夏作の陸稲で始めた畠地の回復では、やはり雑草の発生に苦労した。その経験から今回は冬作の小麦で始める耕作放棄地の回復法に取り組んでみた。牛久市の農業委員会の取り決めでは、畠地の借地料は 10 a 当たり1万2000円ということになっている。高松さんの場合も地主さんは地代にこだわっていない。むしろ高松さんが「無料で借りたのでは誰もが認める経営実験にはならない」と、3年間で10万円の借地料を払う形で $63 \cdot 38\text{ a}$ の畠を借りることにしたのだ。

高松さんは、小麦の後の夏作には緑肥を播き、さらに草を減らして土壤改良を



高松さんの肥料混合のやりかた。まず、混合する肥料を袋から順次に積み重ねる。左右の二人が交互に肥料の山を平スコップで積み替えていく。これを2~3回繰り返せば、具合よく肥料混合ができる

進める予定だ。

夏作にはもとと「儲かる」作物を作ればよいのだと、筆者らは進言したが高松さんの答えは違っていた。

「最初から黒字になる経営計画しか考えられない」ということが、その人の考える企ての限界かもしれませんよ。これまで草ボウボウに荒した畠を回復させようというのですよ。儲けを出すことよりいか

に草を減らせるかを考えるのが畑作経営の基本だと思いますよ。仮に最初の利益が小さかつたとしても、それでも損は無いということを示すのが、この経営実験の目的でしよう。利益の回収は早いに越したことではないけど、それにこだわりすぎるためには意味がない。そんな儲けちゃいけませんよ。それでもちゃんと収支は合せましょうよ。だからこれから数字もキッチリ出していきましょう。そして、3年経つてみたら若い野菜生産者が思い切つ

て野菜作りにとり組めるような畠ができるますよ。私たって損してまでするつもりはないから」

以後の報告では、この畠を「上柏田の畠」と呼び、逐次の報告をするつもりだ。

さて、「上柏田の畠」は、我々が行つた雑な計測ではあるが、約64a。登記簿通りだつた。ただし、図の通り畠は菱形で、また変形の出っ張りがあるために作業にはやや不便もある(図1)。圃場の乾き具合を見ると、南側(図の右側)に行くにつれて排水が悪いようだ。土壤は関東ロームの黒土に一部心土の赤土が混じつた状態である。

ラクタで何度も歩き、草を踏みつけて枯らしてくれていた。

その後をプラウで耕込んだ。プラウ作

業当日の写真が撮れていないのが残念であるが、それだけの作業で枯れたクズはきれいに耕込まれ、そこがあのクズの茂みであつたとはとても思えないほど、きれいな畠がよみがえつた。

その後、石灰を10a当たり5袋(10kg)散布した。麦の播種まで後はそのままのつもりであつたが、スギナが大量に発生したためドライバローをかけた。そこまでする必要はあるのかとも話したのだが、高松さんは「ここで処理しておくことが後を楽にするのだ」という。

そして11月5日、第18号の読者欄で案内した通りに、近隣の読者も集まつて麦播種作業と試作機械のテストを行つた。麦のための肥料は、10a当たりに「くみあい化成・日の本7号(5-9-5)」

2袋+「くみあい過磷酸石灰(可溶性リン酸17%)」2袋。リン酸を効かせた施肥設計とした。同時にバイジエット(3kg)を2袋も肥料に混ぜて散布した。

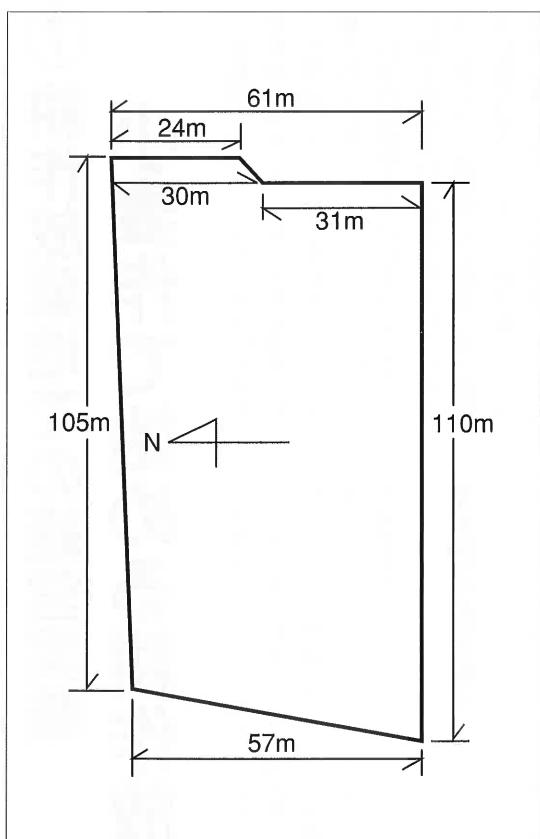
圃場での作業は、まず縦軸の刃が回転

するバーチカルハローで碎土鎮圧を行つた。さらに、トラクタ(28馬力)のフロントにアグリテクノ矢崎(旧多木農工具)

のライムソーワ「クリーンソーウT C S-120S」(10万7800円)を装着

して施肥を行い、同時に1m40のロータリにニンジン播種に使つた「野菜用クリーンシーダ」を条間30cmで5ユニットをセットして播種した。

ライムソーワについて高松さんは、①トラクタへの脱着が容易なこと、②振動装置が付いていること、③断面が星型のゴム製繰り出しローラ(ゴム製アジテーター)の効用が大きく、石灰や肥料の



(図1) 上柏田の計測図

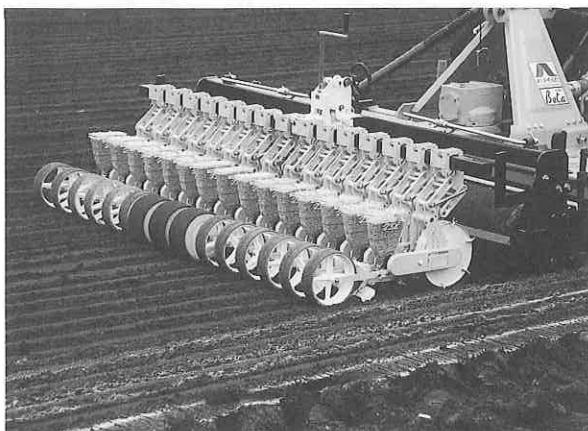


パワー ハローで碎土鎮圧作業

文化通信



28馬力のトラクタで前部にライムソーワを付け、後部には作業幅140cmのロータリに5条の播種機をセットしての作業（条間30cm）



スガノのパワーハローの鎮圧ローラをプラスチックローラとし、それに条間14cmでクリーンシーダ12個並べた瀧島さんの特注機械。写真では、ニンジン播種時には畦間になる部分にも高松さんの播種ユニットを取り付けて作業している

繰り出ししが安定していること、さらに④そのローラは引き出して簡単に洗浄でき、機体自体も分解が容易で掃除が楽であること——など評価している。しかしその反面で、ホップに残量確認の窓がないのはよいが、その窓に残量の減り具合が量的に確認ができる目盛りが付けられていたら、さらに使いやすいはずだと高松さんは注文を付けていた。

というのは、機械には10a当たりの散布量と流量調整をグラフに

した図が付いているがあまり正確ではない。むしろ最初の一工程での内容物の減り具合が分かれば、その後の散布を正確にするための目安になるからだ。

播種は、当初、240cmのドライブハローにセットするつもりで8個の播種ユニットを高松さん購入していたが、施肥に使うライムソーワの散布幅がロータリの作業幅（150cm）に合っているため、条間を30cmの5条播種とすることにした。播種量は、10a当たり5.5kgであ

る。

クリーンシーダには麦・大豆用の播種機も別にあるが、高松さんの播種機は野菜用であるため、麦に使うには種子ホップが小さいため種子補給の面倒さはあつた。それでも播種ロールを麦用に交換することで播種作業自体は問題なく行えることだ。播種作業 자체は問題なく行えてスガノに特注していたものだ。

これは、縦軸のハローであるスガノのパワーハローのローラ部分をプラスチックローラに交換し、その後ろに12ユニットの野菜用クリーンシーダを取り付けたもので、14cmの条間で6条づつ2畝を一度に播種できるようにした。ただし、当

日は高松さんの圃場で麦を播くために、畦間の部分には高松さんの播種ユニット3個を付けて15条（作業幅240cm）での作業とした。

パワーハローのような縦軸ハローであれば、プラウで鋤込んだ雑草やワラもローラの様に掻き出さないので播種精度も増すし、鎮圧による発芽率の向上も期待できる。しかも、碎土鎮圧と播種が作業複合できる。テストでは、ニンジンのコーティング種子と麦の両方にについて播種ロールを変えて行ってみたが、どちらも全く問題なく正確な作業が行えた。

瀧島さんはニンジン作りのプロ。この機械を特別にスガノに製作依頼したのもニンジンの播種のためであったが、高松さんの畠での麦播きの様子を見て、自分の畠でも麦を播くことにしたいと話していた。

パワーハロー播種機 「瀧島スペシャル」